

下記研修会に参加した際に講師から伺ったお話や、自身で感じたことなどを掲載させていただきます。ご一読いただければ幸いです。

2014. 07 内海 秀昭

レフェリーレポート



【参加研修会】

平成26年度 全日本大会担当レフェリー研修会・・・H26. 6. 28（土）～29（日）

【会場】

味の素ナショナルトレーニングセンター大研修室（東京都）

【研修内容】

■研修1 「罰則を適用する違反行為・スポーツマンシップに反する行為」

競技規則8：3、8：4、8：5、8：6の違反行為に対して、位置・部位・程度・影響などを勘案して罰則を適用する事例が紹介された。

両チーム3枚ずつ、計6枚のカードを早急に示すことが目的ではなく、罰則を探すのではなく明確なものを罰すること、競技の開始直後から2分間退場もあり得ること、重大な場面に際してはペアで時間を作って判断すること。

とくに、「後方から」、「高速で」、「空中の」、「顔・のど・首」に対するプレーは2分間退場、またはそれ以上の罰則が適用される行為であるため、きちんと見分ける必要がある。

また、パッシブプレーの予告合図中も判断基準に変化はないことにも触れた。

■研修2 「ウイング（サイド）ポジションでの攻防」

これまでウイングポジションでは、サイドから飛び込もうとするオフENSに対して、ディフェンスは触れただけで罰則を取られるおそれがあったが、今回の研修ではサイドディフェンスが一瞬でも早くオフENSの飛び込む位置にポジションをとれたならば、そのままオフENSがぶつかってきたプレーはオフENSブファールとなる事例が多数紹介された。

『攻撃側の違反』なのか『防御側の違反』なのか？ディフェンスは身体接触が起こる場所に先に位置をとっているか？ディフェンスは横方向に動いていることもありえるが相手に正対した動きか？ディフェンスの隙間は閉じられているか？ボールを離す前に着地していないか？などを見極めた判断をするよう求められた。



また、『罰則を与えるべきか否か』の見極め・基準として、競技規則 8 : 3、8 : 4、8 : 5 を踏まえた上で、シュートしようとする腕を後方からたく、空中にいる選手を押し、大きく足を出してオフenseプレイヤーにとって危険な状況を作り出すプレーには罰則をきちんと適用するよう求められた。

ウイングポジションでの攻防は紙一重（以前に比べてオフenseが危険な状況）となっており、レフェリーの観察（とくにゴールレフェリーの位置取り）が重要となることを強く強調されていた。

（着眼点：ゴールエリアの内？外？、防御側？攻撃側？、罰則はあるか？ないのか？、歩数はOK？OUT？など）

■研修3 「ピボット（ポスト）ポジションでの攻防」

小競り合いやボールがないところでの動きなど、GRがきちんと状態を把握しておくことが肝要。ピボットポジションでの基準を試合の早い段階で示すことが、終盤に向けておおきな意味を持つ。

ブロック、ゴールエリア付近での1対1、影響の見極め、ゴールエリアへの侵入、ユニフォームを掴むなど、映像資料で具体的にOK、OUTの線引きについて説明された。

IHFの映像資料では、これまで考えてきた基準とそぐわないと感じられるものもあったが、こういったズレも自分で消化していきたい。

■講演「コーチとレフェリーのコラボレーション」

コーチとしての立場、レフェリーとしての立場を通して、ハンドボールの進化のために、現代の我々がどう取り組むべきか、これからどこに向かうのか、これまでの傾向や最近のトレンド、将来のビジョンについて筑波大学 藤本監督より講演があった。

■グループ討議「コーチとレフェリーのコラボレーション」

《テーマ》 レフェリーは、自分の伝えたいことを、どのようにしたら選手・役員に伝えることができるのか？

9名ごとのグループに分かれて、各自の経験、心がけなど事例について討議した。私の配置されたグループで印象に残ったものとして、

- ・ ルール伝達講習会へいかにしたらチーム関係者が参加してくれるのか？
- ・ ジャッジのミスをどう対応するのか？
- ・ グレーゾーンの判定を
- ・ 役員からのクレーム・意見は、伝えるチャンスととらえる。

【総括】

今回の研修は、『平成26年度の審判員の目標』を念頭に、同じ国際基準の上に立って適切に対応するための意識・基準の統一を図るものとして開催され、非常に充実したものでした。

藤井審判部長からは、上級レフェリーとして相応しい行動・言動にも心掛けるようにと、体力・技術のみならず審判員個々人の人間性を高めることも重要な要素の一つであるとお話しされ、さらに身が引き締まる思いでした。

今回の研修で得た最近のプレーのトレンドや、判定基準、人間性の研鑽など、今後の審判活動の軸として取り組んでいきたいと思えます。